

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-29

アメリカにあまりに近く、神からあまりに遠く： オクタビオ・パスによるメキシコ論

大西, 亮

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化. 論文編 / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

7

(終了ページ / End Page)

28

(発行年 / Year)

2006-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004528>

アメリカにあまりに近く、神からあまりに遠く

——オクタビオ・パスによるメキシコ論——

Demasiado cerca de los Estados Unidos, tan lejos del Dios

—Una reflexión sobre la cultura mexicana por Octavio Paz—

大西 亮
ONISHI Makoto

I. はじめに

日本とメキシコの間で結ばれた「自由貿易協定」(FTA)が2005年4月1日に発効して以来、このニュースに関する解説ふうの記事を新聞紙上で目にすることも珍しくなくなった。協定発効にいたる交渉の経緯や、協定が今後の日本経済に及ぼす影響、あるいは21世紀の世界経済における協定の位置づけなど、新聞報道を通じてみえてくるのは、先進国の仲間入りをめざすメキシコのさらなる発展の可能性に支えられた、実り多き二国間関係の将来像である。アメリカ、カナダ、メキシコの三国間で結ばれた「北米自由貿易協定」(NAFTA=1994年発効)に典型的にみられるように、90年代以降ネオリベリズム路線を着実に歩んできたメキシコは、貧富の格差の拡大という代償を払いつつも、先進国と肩を並べるほどの経済大国化をめざしているようにみえる。

ところで、メキシコの経済成長に関する記事のなかで目を引くのは、アメリカ合衆国への不法移民を扱った一連の特集である。「メキシコ・あまりに近く」と題された毎日新聞の連載記事は¹⁾、とりわけ90年代以降のメキシコが掲げてきたネオリベリズム経済政策のはらむ負の側面に光をあてたもので、今やアメリカ国内に数百万人いるといわれる不法移民の問題をあらためて浮

き彫りにしている。在米メキシコ移民をめぐる状況は、古くて新しい問題として長らく議論の対象とされてきたが、最近ではサミュエル・ハンチントンが『分断されるアメリカ』のなかで、米国のアイデンティティを脅かす可能性のある存在として、メキシコ系を中心とするヒスパニック住民に注目している²⁾。

彼らメキシコ系移民(=チカーノ)が置かれている状況には、当然のことながら、アメリカとメキシコの間には存在する文化的差異を背景としたさまざまな問題が映し出されているだろう。それは、双方の歴史的・文化的独自性にもとづく根源的な差異であるだけに、容易には埋めがたい溝として彼らの前に存在しているはずである。差別や貧困、地域社会への不適応といった具体的な問題とは別に、彼らはいわば、異質な文化との接触到に起因する何らかの心理的葛藤を背負わされた存在だといえよう。

移民が置かれた状況をひとつの手がかりに独自の米墨比較文化論を試みた人物として、メキシコのノーベル賞作家オクタビオ・パスOctavio Paz (1914-98)の名が挙げられる。詩人として活躍するかたわら、メキシコ革命やスペイン内戦、第二次世界大戦やキューバ革命、あるいは冷戦の終焉にいたる世界情勢の動きなど、20世紀の時代のうねりに敏感に反応しながら次々と発表された彼のエッセイは、きわめて現代性に富む批判精神とともに、詩人としての直観に裏打ちされた鋭敏な感性のひらめきを随所にしのばせている。ここでとりあげる『孤独の迷宮』*El laberinto de la soledad*(1950)や『くもり空』*Tiempo nublado*(1983)をはじめとして、米墨文化比較を扱った著作の多くは、明晰な論理的思考と同居した軽やかな詩的飛躍が大きな魅力ともなっている。

さて、パスの文化論で注目すべきは、アメリカとメキシコの間には横たわる文化的差異を、歴史的な文脈を踏まえつつ、いわば心性のレベルにまで降り立って考察しているところであろう。パスの視線はつねに、風俗習慣やライフスタイルの違いといった顕在的な文化現象の背後に、何気ない動作や言葉づかい、ちょっとした表情や立ち居振る舞いにいたるまで、人間存在のすべてを暗に規定するところの潜在的な差異を鋭くとらえている。そのようにし

て練り上げられたパスの文化論の骨格を紹介するのが本稿の目的であるが、単なる比較文化の枠を超えた壮大な射程を有する彼の思索の全貌を扱うことはもとより不可能である。ここでは、若干の図式化、単純化を承知の上で、エッセンスとなる部分を取り出し、今後の問題提起につながるいくつかの論点を整理するにとどめたい。

最初にとりあげるのは、両国の差異を歴史的背景から浮かび上がらせた『くもり空』である。パスはこの作品のなかで、歴史的事実を丹念に拾い集めながら、両国の本質的な相違を客観的な視点から分析しようとしている。『孤独の迷宮』を読み解くための理論的前提を提示してくれている点でも、この作品を議論の出発点に据えるのは妥当だと思われる。

次にとりあげる『孤独の迷宮』は、米墨文化比較を出発点に、メキシコ(人)のアイデンティティをめぐる本格的な考察に踏みこんだ意欲的な作品である。パスの創作のなかでは比較的初期に属するこの作品には、「メキシコ人とは何か」を生涯問いつづけた彼の問題意識が最も純粹な形で鮮明に現れている。本稿では、アメリカとの比較にかかわる部分を中心に、メキシコ(人)をめぐるパスの考察の要点を紹介したい。

II. 『くもり空』における米墨比較文化論

1. カトリシズムとプロテスタンティズム

メキシコの独裁者ボルフィリオ・ディアス⁹⁾の言葉に、「あわれなメキシコよ、アメリカにあまりに近く、神からあまりに遠い」というのがある。アメリカ合衆国と国境を接するメキシコの運命を皮肉ったこの言葉は、19世紀半ばの米墨戦争(1847-48)による国土面積の52パーセント喪失という出来事に象徴されるように、<北の巨人>と肩を接して生きることを余儀なくされたメキシコの歴史的悲哀をいくぶん自嘲気味に表現したものだが、それと同時に、現在のメキシコが良きにつけ悪きにつけアメリカとの共存のなかで自己の進路を決定していかざるをえない状況を物語っている。メキシコのアイ

デンティティの探求を創作の最大のテーマに掲げていたパスが、思索の出発点としてアメリカとの関係に着目したのは、ごく自然の成り行きだったといえるかもしれない。

では、パスがみたメキシコとアメリカの関係とはいかなるものであったのか。彼の発言をいくつか拾ってみよう。

パスの論旨に一貫するのは、北と南、文明と貧困、未来と過去、排除と包括といった対概念の使用である。素朴な図式化を思わせる二項対立の頻出は、メキシコとアメリカの対照性を際立たせるための論法というよりも、彼の詩作の常数ともいべき対立するイメージの並置の手法を文明論に応用した結果といえるだろう。両国の差異を単に外見的相違としてではなく、人間の内面にかかわる本質的な相違としてとらえていたパスは、詩的作法の助けを借りながらその核心に迫ろうとした。

物理的・政治的な国境以上に、深刻な心理的差異が両者を隔てている。これらの差異はきわめて明白であり、開発と低開発、富と貧困、強者と弱者、支配と従属などのよく知られた皮相な対立に還元されるかもしれない。だが真の意味で基底をなす差異は目に見えない。その上、おそらく克服することもできないだろう(168)。

こう述べるパスは、両国の間に横たわる本質的相違を、「われわれは同じ西洋文明に属する二種の異文である」(168)と説明する。「二種の異文」(dos versiones)とは、メキシコの宗主国であるスペインとアメリカの宗主国であるイギリスの植民地政策の違いがもたらした対照的な二つの社会の成り立ちを意味する。パスによると、その根底には、イギリスのプロテスタンティズム、あるいはピューリタニズムに対するスペインのカトリシズムという対立構図が横たわっている⁴⁾。

聖書の自由な解釈と信仰の内面化を説いたプロテスタンティズム、あるいは、カルヴァン主義の立場から信仰と生活の清純を追求したピューリタニズムは、腐敗と墮落に染まるカトリックの権威主義を糾弾し、さらにピューリ

タニズムの場合、カトリック的要素の残滓をとどめる英国国教会に異を唱えることによって「宗教に対する宗教面からの批判」(182)を行ったが、パスはそこに、後のアメリカ社会を方向づけることになる近代民主主義の萌芽を認める。つまり、宗教面での批判精神の存在が、政治面での批判精神の伝統を育み、やがて自由や平等、正義、デモクラシーといった理念が花開く土壌を準備したというのである。もちろん、アメリカ社会の発生の由来をすべてプロテスタンティズムやピューリタニズムに求めることはできないが、メキシコ社会との著しい対照性という観点から眺めるとき、パスの論理は説得力をもって迫ってくる。

アメリカとは対照的に、スペインによってカトリシズムが持ち込まれたメキシコでは、正統的な権威への追従という伝統が根を下ろすことになった。スペインのカトリックに従来備わっていた傾向——偏狭かつ独断的な教義、複雑な教会ヒエラルキー、内面の信仰よりも壮麗な儀礼を重んずる宗教観——は、新大陸に移植されると、よりいっそう純化された形で顕在化する。例えば、異端審問制度が発達していた植民地時代のメキシコでは、自由思想を鼓吹する小説の輸入は教会によって禁止されていた。パスによると、批判精神の芽がことごとく摘みとられたメキシコでは、変化よりも持続を志向する保守的な社会が形成され、結果的に近代への扉が閉ざされることにもなった。この状況は独立を経た後も基本的に変わらず、長期独裁制の発生や近代民主主義の不在など、現在にいたるメキシコの宿病となって受け継がれている。

批判精神の欠如にもとづく近代民主主義の不在という観点は、メキシコの歴史を概観する際にパスが繰り返し強調する重要なポイントである。アメリカ合衆国の独立やフランス革命の影響の下に独立を達成したメキシコは、その後も相次ぐ内乱や度重なる独裁者の出現など、真の民主主義の確立とはほど遠い不安定な政治状況を迎えることになった。ベニート・ファレス⁴⁾による改革運動にしる、ポルフィリオ・ディアスによる近代化政策にしる、それらは表向き国家の近代化を旗印に掲げてはいたものの、実際には植民地時代の封建的伝統を引きずった前近代的な政治理念の表れにほかならなかった。独立の機運を生み出したフランス啓蒙思想の輸入以来、メキシコはさまざまな

機会に欧米の先進的な思想を取り入れてきたが、それらは結局のところ借り物の「空虚な理念」(135)にすぎず、メキシコの風土に根づくことはなかった。つまり、メキシコの実情に即した内発的な発展の必要性からそれらの思想が導入されたのではなく、あくまでも近代国家としての体裁を取り繕うための抽象的な概念として借用されたにすぎなかったのであり、その背景には、批判精神の伝統を欠いたメキシコの歴史的事情が絡んでいたのである。

2. 「排除」と「包括」

次にパスが目にするのは、プロテスタンティズム、あるいはピューリタニズムとカトリシズムの対照性をもたらすもうひとつの帰結、すなわち「排除」(exclusión)と「包括」(inclusión)の対立である。この対概念は、おもに先住民に対する植民者たちの態度にかかわる。

周知のように、先コロンブス期に現在のアメリカとメキシコの領土に居住していた先住民は、ともにベーリング海峡を渡ってきたモンゴロイドの血を引く人種に属するが、両者の間には大きな違いが存在した。狩猟採集に携わる遊牧の民であった北米の先住民に対し、メキシコを中心とする地域に定住した先住民は、早くからトウモロコシ栽培に従事する農耕民として、オルメカやテオティワカン、マヤやアステカをはじめとする高度な都市文明を築いていた。このような相違の上に、先住民政策におけるスペインとイギリスの対照性が組み込まれ、それが後のメキシコとアメリカの本質的な相違を形づくることになった、とパスはいう。

<保留地>の存在が示すように、先住民に対する排除や隔離の姿勢を貫いた北米の植民者と異なり、メキシコに根づいたスペイン人たちは、先住民をみずからの生活圏のなかに取り込むことによって、社会全体の混血化を推し進めた。先住民に対する搾取や差別といった現実にはあったにせよ、社会階層の底辺を占める貴重な労働力として、ともかくも彼らとの共存、共生の道を選んだのである。すでに高度な都市文明のなかに組み込まれていた先住民の労働力を組織的に利用することが比較的容易であったという事情もあるが、いずれにせよ、人種的、文化的な混交がその後のメキシコ社会の核を形成す

ることになった。

イギリス人とスペイン人による対照的な先住民政策の背後に、ピューリタニズムとカトリシズムの労働観の違いが存在することはよく指摘されることである。失業農民やピューリタンの家族ぐるみの移民が大部分を占め、人間を解放する救済としての労働という観念が発達していたニューイングランドの植民地社会に対し、メキシコにやってきたスペインの征服者および植民者たちは、労働蔑視の宗教観の影響を多かれ少なかれ受けていた。とりわけ初期の征服者たちは、異教徒に対する聖戦という高貴な使命を託された軍人であり、みずから手を汚して日々の労働に携わることを忌避する傾向があった。また、男性集団のなかに生きる彼ら征服者たちは、先住民女性との積極的な交わりを通して、混血化の道を切り拓くことにもなる。

白人（スペイン人）と先住民の混血である「メスティソ」(mestizo)が人口の約7割を占めるメキシコでは、文化的混交という現象はとりわけ重要である。典型的な例として挙げられるのは、メキシコ人の精神的支柱ともいえるべき「グアダルーベの聖母」(Virgen de Guadalupe)に対する信仰であろう。褐色の肌をしたこの聖母は、キリスト教の聖母マリアとアステカの女神トナンツインの融合形態として、植民地時代初期からメキシコ人の宗教心の拠り所となってきた。また、先住民が多く住むメキシコ南部の教会では、オコテ（メキシコ産のマツ）の煙が濃厚に立ちこめる祭壇に民族衣装を身にまとった褐色の肌のキリスト像が祀られているなど、現在のメキシコにおいても宗教的混交を示す事例には事欠かない。これらの例が示唆するのは、ヨーロッパ的な外観の下に脈打つインディオ的な世界の存在であろう。まさに「インディオはメキシコの骨」(174)という状況が今も生きつづけているのであり⁹⁾、この点でアメリカとは明確な対照性を示している。パスの言葉をみてみよう。

インディオ的なものは、メキシコの民衆宗教のみならず、メキシコ人の生の全体に溶け込んでいる。家族、愛、友情、父母に対する態度、民間伝承、礼儀作法や共同生活のしきたり、料理法、権威や政治権力の表象、死と性をめぐる観念、労働や祭礼にいたるまで(174)。

さて、先住民に対するイギリス人とスペイン人の対照的な姿勢を生みだした根本的な要因としてパスが次に注目するのは、プロテスタンティズム、あるいはピューリタニズムとカトリシズムのそれぞれにみられる「純潔」(pureza)と「共感」(comuni3n)の概念である(176)。パスによると、メキシコ人にとって「共感」とは、「分離ではなく参加、断絶ではなく結合、森羅万象の偉大なる混交、始原のときの聖なる沐浴、純と不純の彼方にある状態」(177)を意味する。これが結果的に異教徒たちの世界を包括的に取り込む要因として働いたことは容易に想像できる。さらに、もともと異教的な要素を同化吸収することによって成立した習合主義的なローマ・カトリックの歴史を思えば、メキシコに移植されたカトリシズムが先住民の宗教を柔軟に取り込むことに成功したのもうなずける。

いっぽう、「共感」の対極に位置する「純潔」の原理に従ったアメリカは、〈他者〉に対する排除の姿勢を確立することになった。パスによると、ネイティヴ・アメリカンや黒人、チカーノ、プエルトリコ人をはじめとする国内の少数派のみならず、「国外における周縁的な文化や社会」(189)を排除の対象としてきたアメリカは、同じく先住民という〈他者〉を内に含むことによって成立した混交型のメキシコ社会とは対照的に、複数のエスニック集団が互いに融合することなく並存する分離型の社会を築くことになった。このことは、のちに触れるアメリカ社会のもう一つの側面、すなわち、歴史の不在にもとづく未来志向型の社会という問題にもかかわってくる。

ところで、「共感」をめぐるパスの発言のなかで見逃せないのは、それがメキシコ人の祭礼観を規定する基本原理ともなっているという指摘である。祭りに参加するメキシコ人は、「共感」の原理に突き動かされながら、あらゆるものを原初の混沌に溶かし込む熱狂的な祭儀空間のなかに投げ込まれ、個を超越した未分化の状態のなかで〈他者〉との合一を経験する。パスの指摘は、祭りの機能を〈始原への回帰〉という視点から分析したミルチャ・エリアーデやロジェ・カイヨワの説を思い起こさせるが³⁾、ここでのパスの主張の力点がアメリカとの比較対照に置かれていることはいうまでもない。救済としての

労働の美德をとりわけ重視したアメリカのピューリタンたちは、消費の原理に支えられた祭礼の世界とは本質的に無縁であったとパスはいう。

3. 未来志向と過去志向

エドワード・T・ホールの『文化としての時間』や真木悠介の『時間の比較社会学』にも明らかなように⁹⁾、時間はあらゆる文化の核になる体系であり、それぞれの文化は、独自の時間枠のなかで固有のリズムを刻む生命体として理解することができる。パスもまた、「文明とは、社会がそれぞれもっている世界観であると同時に、その社会の時間感覚でもある」(170)、「一個の社会の本質は時間に対するその態度によって規定される」(183)と述べながら、文化や社会の本質を規定する時間概念の重要性を指摘している。

先にみたように、先住民に対する排除や隔離の姿勢を貫き、いわば先住民の不在の上に築かれたアメリカは、パスによると「過去をもたぬ大地の上に建設された」(174)未来志向型の社会を形成することになった⁹⁾。

アメリカ人は現在の極限に生きており、いつでも未来に向けて跳躍することができる。国の土台は過去にではなく、未来にある。換言すれば、その過去、その建国の歴史は未来への約束であり、アメリカはその起源へ、その過去へ回帰するたびに、未来を再発見することになる(183)。

パスの論で興味深いのは、未来志向型のアメリカ社会を方向づける「時間における可動性」(183)が、「物理的・地理的可動性」(183)に、すなわち「絶えず前進する国民であるアメリカ人の並外れた空間移動の能力」(183)に対応しているという指摘である。このことは、例えば<明白なる天命>(Manifest Destiny)の下で進められたテキサス併合(1845)や米墨戦争による新たな領土の獲得、あるいは西部開拓(先住民討伐)の歴史や陸のフロンティアが消滅した19世紀末以降の帝国主義的対外進出などを想起すればうなずけるであろう。いずれの場合においても、絶えざる領土の拡張がそのまま大国としての未来の構築につながるような、時間、空間両面にわたる国家レベルでの前進

主義がみられるとってよい。

次にメキシコの場合をみてみよう。「インディオはメキシコの骨」という状況が今も生きつづけるメキシコは、幾重にも積み重なる過去によって支えられている。このことは、メキシコ・シティの建設をめぐる歴史が象徴的に物語っている。古代アステカ帝国の首都であったテノチティトランは、スペイン人征服者の手によって徹底的に破壊され、その残骸の上にメキシコ・シティが建設された。現在でも、街の中心部の一角を占める<メトロポリタン・カテドラル>(Catedral Metropolitana)の地下には、アステカ時代の神殿群の遺跡が眠っているという。ところで、そのテノチティトランは、先行するトルテカ文明の主要都市であったトゥーラをモデルにして建てられ、そのトゥーラはさらに、先行するテオティワカン文明の中心都市を模倣して建設されたといわれている。これとよく似たことは、アステカ時代に築かれたピラミッドについてもいえる。それらの多くは、先行する古い時代のピラミッドを土台として建てられており、二重、三重に積み重なる過去の断層がそのまま建築の構造に反映されている点で、例えば古代エジプト文明のピラミッドにはみられない独自性を指摘することができる。

重層的な過去の上に築かれたメキシコ社会の特質は明らかであるが¹⁰⁾、パスはさらに、近現代のメキシコ史を画する重要な事件の際に民衆レベルで表出された明確な過去志向の意思に注目している。一例として挙げられるのが、メキシコ革命期に活躍したエミリアーノ・サパタ¹¹⁾が率いる農民運動である。サパタが主張した農地改革の眼目は、新しい社会組織の確立ではなく、先コロンブス期の土地所有形態である農地共有制への回帰であった。これを踏まえた上で、パスは次のように述べている。

革命家たちが本能的に思い描く黄金期のイメージは、実に遠い過去に遡るのだ。彼らにとってのユートピアは、未来を築くことではなく、起源へ、始原へと立ち戻ることであった(183)。

パスの発言は、現在のメキシコにおける「サパティスタ民族解放軍」

(EZLN)の動向をみていく際にも示唆的である。「北米自由貿易協定」(NAFTA)発効の当日(1994年1月1日)を武装蜂起の日を選んだこのゲリラ組織は、貧富の格差の拡大や先住民をはじめとする社会的弱者の切り捨てなど、経済のグローバル化がもたらすさまざまな問題に警鐘を打ち鳴らし、真の平等社会の実現をめざして現在も活動中であるが、メキシコ革命の英雄の名を冠したこの運動が、パスのいう「始原への回帰」を精神的原理に掲げていることもあるいは考えられるかもしれない¹²⁾。

以上がパスによる歴史的総括の概要である。比較的よく知られた事実の再確認という面はあるにせよ、両国の対照性を浮き彫りにする論旨展開の巧みさや明快さ、切り口の鋭さは注目に値する。のみならず、排他的なく他者>政策のはらむ危険性を見据えたパスの視点は、アメリカが唱導する対テロ戦争の是非がさかんに論議されている現在においてもその有効性を失っていないといえるだろう。

Ⅲ. 『孤独の迷宮』における米墨比較文化論

1. 移民をめぐる状況

歴史的総括におけるパスの考察がさらに深く掘り下げられているのが、ここでとりあげる『孤独の迷宮』である。『くもり空』よりも33年前に書かれたこの作品は、その内容のみに注意を払うならば、『くもり空』で示された論理的思考の筋道を詩的感性のレベルでたどりなおしている感があり、その意味でも両作品は、創作を通じてパスが一貫して追究したテーマを相互補完的に示すものといえる。本稿では便宜上、論理的思考の筋道が明瞭に表れている『くもり空』を先にとりあげ、詩的散文の趣をもつ『孤独の迷宮』を後に回したが、『孤独の迷宮』を書いたときのパスが、やがて『くもり空』で展開されることになる歴史的考察を念頭に置いていたであろうことは想像に難くない。

さて、詩的イメージの横溢する文体によって書かれた『孤独の迷宮』の読

解は決して容易ではなく、作品を要約することも難しいが、その内容をあえてひと言で示せば、メキシコ人のアイデンティティをめぐる詩的考察ということになるだろう。「われわれは何者なのか、自分自身をいかに実現すべきなのか」(1)と問いかけるパスは、在米メキシコ移民が置かれている状況、メキシコ人が無意識のうちに身につける仮面(性)、メキシコの伝統行事のなかでもとりわけ重要な意味をもつ「死者の日」(Día de Muertos)、スペインによる征服と植民の歴史など、いくつかのトピックを材料に独自の考察を展開しながら、メキシコ人の本質を規定する重要な要素として「孤独」(soledad)の概念を提起する。

メキシコ人の本性を鋭い感性で剔抉する手法は実に鮮やかというほかないが、詩的跳躍を原動力としたパスの文体は、ともすると主観的な印象を与えることも事実である。二年間の米国滞在の経験をもとに書かれたこの作品について、パスは、「個人的な問いに対する個人的な答えとしての価値しかない」(13)と述べているが、厳密な考証を踏まえた学術的な論考とは異質なこの作品が、ひとりのエリート知識人によるきわめて独創的かつ内省的なメキシコ(人)論となっていることは間違いない。したがって、一般的なイメージからかけ離れたメキシコ人像——孤独、内向性、自己韜晦、悲観主義、劣等感、等々を特徴とするメキシコ人像——が描かれているとしても驚くにはあたらない。

パスはまず、ロサンゼルスを訪れたときの印象を語っている。メキシコ系移民(=パチュコ)¹⁹が多く住む地区に足を踏み入れると、そこは「漠然としたメキシコの雰囲気」(5)に支配されており、「正確さと有効性からなる米国世界」(5)に対立する「装飾に対する好み、無頓着と豪華、無精、熱情と慎重」(5)に彩られた世界が広がっている。街の雰囲気のみならず、そこに住むパチュコたちも、派手な服装や特徴のある言葉づかい、独特の風貌や雰囲気によって人目を引く存在となっている。彼らはみな、「偽装している者、自分を丸裸にするかもしれない他者の目を恐れる者の、人目を忍んだ落ち着きのない態度」(5)を示している。「自らの素性を恥じている」(5)彼らは、自己の存在を隠しながらも周囲に対しては強烈に自己主張せざるをえない矛盾した

状況に置かれている。それは、二つの文化の間を揺れ動く不安定な自我がもたらす心理的な「葛藤」(6)に起因するものであり、ある種の自己防衛本能にもとづく攻撃性を物語るものでもある。パチュコたちの「偽装」は、こうして「自分を隠すと同時に際立たせる」(7)。

パスの観察は半世紀以上も前のものであり、その点を考慮しないわけにはいかないが、移民が置かれた状況、とくにその心理について述べた言葉は注目に値する。異文化交流のいわば最前線に身を置く彼らパチュコたちは、二つの文化のせめぎ合いを心理的葛藤のドラマとして体験することを強いられている。また、アメリカとの著しい対照性という観点から眺めるとき、彼らはメキシコ人の本性を顕在的に示す存在といえる。パチュコにみられるさまざまな特質を手がかりに、私たちはメキシコ人一般の性質を帰納的に類推することができるはずであり、パスもまたそのような方向で論を進めている。例えば、パチュコにみられる「偽装」は、メキシコ人の本質を規定する「仮面(性)」の概念に発展させられ、詳細な分析を施されている。

自己の本性を隠そうとするパチュコたちの内向性とは対照的に、アメリカ人は、「確信と信頼、あけっぴろげな陽気さ、周囲の世界との明らかな一致」(13)によって特徴づけられる。「現実の肯定的な面だけを見ようとする」(17)彼らの楽観主義は、「生に対する本来的な善性、ないしはその可能性の無限の豊かさへの確信」(14)によって支えられているが、そこには「偽善」(15)の影がわずかに認められる。また、「将来があたかも無尽蔵であるかのよう」(14)に振る舞う彼らの行動は、未来志向型のアメリカ社会のあり方に対応するものといえる。

アメリカ人の特質について述べたパスの言葉は、ある種の類型化を免れていないともいえるが、メキシコ人の本性を際立たせるための対立項の役割を効果的に果たしている。メキシコ人を特徴づける内向性や仮面性は、アメリカ人にはみられないものであり、メキシコ人の本質を規定する「孤独」の概念に収斂するものとして、パスがとくに注目しているものである。

2. 「孤独」の乗り越え

本書の主要テーマである「孤独」について、パスは、それが国や文化の違いを超えた普遍的な人間存在のあり方を規定するものであるとしながらも、メキシコ人の「孤独」が他の国民にはみられない特殊な性質を帯びていることに注意を促している。それは「いまだに貪欲な神々が住む高原の偉大なる石の夜の下での孤独」であり、例えば「機械と同胞意識と道徳律の抽象的な世界にさ迷う米国人の」(11)孤独とは本質的に異なるものである。「我々の孤独は、宗教的感情と同じ根をもっている」(12)と述べるパスは、神話的、宗教的な背景を有するものとしてメキシコ人の「孤独」をとらえている。

「孤独」をめぐるパスの考察が、メキシコ文化の基層に息づく先住民の世界を踏まえたものであることは明らかである。マヤやアステカをはじめとする古代文明の宗教や伝説を引用しながら展開されるパスの「孤独」論は、神話的なイメージを随所に散りばめた詩的散文の響きを伝えている。同じことは、次にとりあげる「祭り」についてもいえる。

「孤独」であるがゆえに「祭り」を愛するメキシコ人は、「メキシコの最も古くて秘められているものとの交わり」(42)を可能にする「祭り」のなかで、「外部へ向けて自分を開く」(43)。つまり、祭りがもたらす陶酔のなかで自己を解き放ち、「彼を隔離する孤独の壁を乗り越え、飛び越える」(44)。メキシコ人にとって「祭り」とは、「自分自身を燃やしてしまう陶酔、空中への発砲、花火」(49)にほかならない。

「宗教的感情と同じ根」をもつ「孤独」を乗り越えるための手段として、同じく宗教的な背景を有する「祭り」が要請されるのも不思議ではない。『くもり空』と同様、ここでもまた、宗教的・神話的な次元のなかに「祭り」の機能が位置づけられる。あらゆる秩序や価値の転覆を伴う「祭り」は、すべてのものが未分化の状態で溶け合う<始原のとき>を再現する。祭りの参加者たちは、創世以前のカオスに回帰することによって、「相反するものが融合し、生と死、時と永遠が結合する充実した生の一瞬」(209)を生きる。彼らはそのなかで「孤独」の殻を突き破り、「他者」(207)との交流に向けて自己を開く。「祭り」は聖なる「交わりの探索」(207)であり、「世界との一致」(208)を約束する「真の再創造」(47)でもある。

ここでの「交わり」が、「くもり空」における「共感」の概念に相当するものであることは明らかである。「共感」と「純潔」の対立によってメキシコとアメリカの対照性が浮き彫りにされたように、ここでは「交わり」に対立するものとして、清教徒の禁欲主義が対置される。パスの言葉を引いてみよう。

(清教徒にとっては) すべての接触が汚染となる。異なった人種、思想、習慣、肉体は、破滅と不浄の芽をそれ自身の内に宿している。(中略) 逆に、古代あるいは現代のメキシコ人は、交わりと祭りを信じる。接触のない救いはない(16)。

このことに関連して、パスはメキシコ人にみられる特徴的な肉体観にも言及している。抽象的かつ観念的な肉体観に支配されているアメリカ人とは異なり、メキシコ人は何よりもまず、触れることのできる具体的な現実としてみずからの肉体を意識する。それは、理性的な認識の対象としてではなく、なまなましい存在感を備えた実体として知覚される。パスは、「われわれは、われわれの肉体である」(28)と述べながら、メキシコ人のアイデンティティの根幹に食い込む肉体性を示唆すると同時に、アメリカ人における「肉体への恐怖」(27)との対照性を強調している。

3. 死の観念をめぐる考察

メキシコ人の肉体観は、死に対する観念にも影響を与えている。メキシコ人にとって死とは、観念のレベルで引き起こされる抽象的な出来事ではなく、つねに具体的な現実として現れるものである。それは、どこまでも肉体の死として知覚されるところの直截的な経験である。

死に対するメキシコ人の態度をみていく際に見逃せないのは、毎年11月1日、2日に行われる「死者の日」の儀礼である¹⁴⁾。日本の盆行事に例えられることもある「死者の日」は、祖先の霊を迎えるためのさまざまな儀式や風習からなる祝祭日であるが、カトリックの「諸聖人の日」と先住民の宗教儀礼が融合した独特の招魂祭として、メキシコ人の死生観を探る上で格好の材料

を提供してくれる。この祭りはまた、旧ソ連の映像作家エイゼンシュテインが未完の映画『メキシコ万歳!』のなかに取り込むことを構想していたことでも知られる¹⁹⁾。

「死者の日」が近づくと、死者の霊を迎えるための祭壇には色鮮やかな飾りつけが施され、ブルケ（竜舌蘭酒）をはじめとするアルコール類のみならず、頭蓋骨をかたどった砂糖菓子やパン、花や果物などが供えられる。祭りの参加者たちは、酒を飲み、音楽をかなで、にぎやかに談笑しながら、死者との対話の時を過ごす。そこにみられるのは、儀式ばった厳粛な雰囲気ではなく、華やかな色彩と打ち解けた雰囲気包まれた庶民的な祝祭の姿である。人々は、祭りがもたらす高揚感のなかで解放的な気分になり、あたかも死者の霊とたわむれるかのように陽気に振る舞う。髑髏の形象がいたるところにみられる町の様子からは、死を身近なものとして可視化するメキシコ人の心性がうかがえる。

パスは明言していないが、「死者の日」が私たちに示しているのは、死（者）との「交わり」あるいは「共感」だろう。生者と死者を分かち垣根は取り払われ、両者は聖なる祭儀空間のなかで親密な交流を繰り広げる。頭蓋骨をかたどったパンや砂糖菓子を食べる風習も、死者との交流を実現するための儀礼的なカニバリズムとして理解することができる。メキシコ人は死を遠ざけ、隔離するのではなく、死との共生、共存を無邪気に楽しむのである。生にとって究極の〈他者〉である死と交わることによって、生をよりいっそう活性化させる、あるいは、充実した包括的な生を享受するといってもよい。この点については、パスの次の言葉が注目に値する。

メキシコ人は、死に親しみ、死を茶化し、死を愛撫し、死とともに眠り、そして死を祝う。(中略) もどかしさ、さげすみ、あるいは皮肉をこめて、死を正面から見つめるのである(53)。

同じくエイゼンシュテインは、「死者の日」について以下のように語っている。

メキシコ人はさらに死をあざ笑うのだ。「死者の日」——11月2日——は、死と、死の象徴であるお下げ髪つきの骸骨とをあざ笑って、とめどなくはしゃぎまわる日である¹⁶⁾。

上にみた死者との「交わり」は、パスのいう「宇宙のプロセス」(50)への参加を意味する。アステカの宗教に典型的にみられるように、先住民の世界観の背景には、円環的な時間概念にもとづく世界の無限回帰という観念が生きている。世界は一定の周期のもとに誕生と死滅を繰り返す。そこに人間の自由意志が介入する余地はない。私たちの生と死もまた、「飽くことなく繰り返されるひとつの宇宙のプロセス」(50)のなかに組み込まれており、「無限の円環の一つの相」(49)をなすものとしてあらかじめ定められている。メキシコ人は死との「交わり」を通して、永遠に繰り返される宇宙のプロセスに参入するのである。

このように、メキシコ人にとって死は、個人的な死を意味するよりも、個人を超越した壮大な宇宙のプロセスの一部を構成するものとして位置づけられる。キリスト教を信仰しながらも先住民の宗教の記憶をいわば集合的無意識のうちに保持している彼らは、死の超越性を神話的次元において自然に感得する術を心得ている。死をめぐるパスの考察からは、そんなメキシコ人の姿が浮かび上がってくる。

IV. むすび

メキシコとアメリカの比較から出発したパスの論考は、こうしてメキシコ(人)のアイデンティティをめぐる神話論的考察へ行きつく。死や孤独、祭りのみならず、メキシコ人の生活を取り巻くあらゆる事象が神話的な色彩を帯びたものとして語られるのである。このことは、前章でとりあげた『孤独の迷宮』のみならず、メキシコをテーマとしたパスの著作のすべてにみられる

特徴だといってよい。私たちはそこに、詩人としてのパスの性向のみならず、メキシコの現実に対する先鋭な問題意識の表れをみるべきだろう。

すでにみたように、独立以降さまざまな困難に見舞われてきたメキシコは、欧米諸国を模範とした国家の近代化に取り組んできた。その試みの大半は挫折し、度重なる政情不安や独裁制の発生、不正や腐敗の横行する政治風土の定着など、現在にいたるメキシコの恒常的な問題が生みだされることになった。メキシコの風土に根ざした近代化の達成という課題はこうして現在にまで持ち越され、国家の進むべき道を見定めるための模索が今も続いている。「サパティスタ民族解放軍」による抵抗運動も、グローバリゼーションの波にさらわれていく伝統的な文化や価値観を回復するための絶望的な試みだといえるだろう。

このような状況のなか、パスによるメキシコ（人）論は多くの示唆を与えてくれる。秘められた先住民の世界に光をあてることによってメキシコの真の姿を浮き彫りにしたパスの視点は、見せかけの近代化の陰で忘れ去られたメキシコの伝統を取り戻し、メキシコの本質に根ざした未来を構築するための道筋を示すものといえる。それは単なる過去への回帰ではなく、先住民の伝統を含む多様な文化の見直しに通じるものであろう。〈対立物の一致〉を説くパスの詩論に倣っていえば¹⁷⁾、“あれ”か“これ”かの二者択一ではなく、異なる複数の文化的要素を内に含む包括的な社会の実現に向けた見直しである。

アメリカとの関係についても同じことがいえるのではないか。プロテスタントイズムとカトリシズム、排除と包括、未来志向と過去志向など、さまざまな二項対立を軸に展開されるパスの考察は、双方の違いを際立たせるための単なる比較対照を目的としたものではなく、普遍的な人間生活の営みとともに支える二つの文化様態として両者をとらえなおす試みだといってよい。

地理的にあまりに近いがゆえに鮮明な対照性を際立たせるメキシコとアメリカは、歴史的にもさまざまな摩擦や対立を引き起こしてきた。しかし、パスの考察により浮かび上がってくるのは、相対立する両者の相互補完的な関係に支えられた包括的な人間社会のビジョンであり、人間生活という共通の

場において最終的な調和に達するような、創造的な異文化交流の可能性である。このことは、異なる文化や価値観の共存がかつてなく求められている現在の私たちにとっても重要な問題を提起している。パスの文化論を読みなおす意義もそこにあるといえるだろう。

使用テキスト

1. Octavio Paz, *El laberinto de la soledad*, Enrico Mario Santí, ed., Madrid, Cátedra, 1998
2. Octavio Paz, *El laberinto de la soledad*, México, Fondo de Cultura Económica, 1992
3. Octavio Paz, *Tiempo nublado*, Barcelona, Editorial Seix Barral, 1998
4. オクタビオ・パス『孤独の迷宮——メキシコの文化と歴史』高山智博、熊谷明子訳、法政大学出版局、1982年。
5. オクタビオ・パス『くもり空』井上義一、飯島みどり訳、現代企画室、1991年。

※ 引用箇所については各所でページ数のみを示した。本文中の引用については原則として訳文にしたがったが、前後の文脈の関係上、場合に応じて若干変えさせていただいたことをお断りしておく。

注

- 1) 「反米、従米、親米、嫌米 第15部 メキシコ<あまりに近く>①-⑤」2005/06/14/火曜日-2005/06/18/土曜日、毎日新聞、朝刊、14版、9,7,11,8,9頁。
- 2) サミュエル・ハンチントン『分断されるアメリカ』鈴木主税訳、集英社、2004年、309-357頁。
- 3) ポルフィリオ・ディアスPorfirio Díaz(1830-1915)。1910年に勃発したメキシコ革命によって政権の座を追われるまで、30年間以上独裁者として君臨。実証主義や功利主義の積極的な導入を通して国家の近代化に取り組んだ。
- 4) 周知のように、建国13州の母体となった植民地は、イギリス国教会の下に置かれたジェームズタウンを中心とするヴァージニア植民地と、ピルグリム・ファーザーズやマサチューセッツ植民者等のピューリタンによって建設されたニュー・イングランドの二つに大別されるが、パスは、今日のアメリカの民族的アイデンティティの信条的拠点、あるいは現在のアメリカを規定するあらゆるもののプロトタイプとしておもに後者に注目している。
- 5) ベニート・フアレスBenito Juárez(1806-1872)。メキシコ史上初の先住民(サポテカ族)出身の大統領。「改革諸法」(Leyes de Reforma)と呼ばれる自由主義改革を次々と打ち出し、政教分離や教会権力の剥奪等、反教会政策の徹底的な実施を通して国家の近代化に取り組んだ。現在では20ペソ紙幣(=約220円)の肖像に用いられている。
- 6) メキシコを中心とする「メソアメリカ」(Mesoamérica)に定住した先住民の呼称

としては、「インディオ」(indio)や「インディヘナ」(indígena)が知られているが、差別的なニュアンスを含むという理由から前者に代わって後者を用いる場合がある。

- 7) この点については以下の書を参照。ミルチャ・エリアーデ『聖と俗』風間敏夫訳、法政大学出版局、1993年、76-86頁。ロジェ・カイヨワ『人間と聖なるもの』塚原史他訳、せりか書房、1994年、145-193頁。
- 8) この点については以下の書を参照。エドワード・T・ホール『文化としての時間』宇波彰訳、TBSブリタニカ、1983年。真木悠介『時間の比較社会学』岩波書店、1991年。
- 9) パスはさらに、過去の不在によって規定されたアメリカの歴史を映し出すものとして、ホイットマンからウィリアム・カーロス・ウィリアムズ、メルヴィルからフォークナーにいたる文学の潮流に注目し、それらが「アメリカの根の探求（あるいは創造）」(175)の衝動によって生みだされたと述べている。
- 10) ハンチントンは、歴史に対するアメリカ人とメキシコ人の対照的な態度に関して、メキシコの前外務大臣ホルヘ・カスタニェダの見解を紹介している。カスタニェダによると、それは「メキシコ人は歴史ばかり考えており、アメリカ人は将来ばかりという使い古された言葉」に表されるという（ハンチントン、前掲書、354頁）。
- 11) エミリアーノ・サパタEmiliano Zapata(1879-1919)。メキシコ革命期にモレロス州の貧農の指導者として活動。根本的な社会変革のための農地改革の必要性を主張し、土地の公平な分配を骨子とする「アヤラ綱領」(Plan de Ayala)を策定したが、そのために微温的な改良主義派指導者と激しく対立、最後は政府軍将校に暗殺された。
- 12) 「サパティスタ民族解放軍」は、2001年に行われたメキシコ市への平和行進の際、メキシコ革命の英雄エミリアーノ・サパタがたどったのと同じ道を行進することによって、その過去志向の意志を象徴的に表明した。「サパティスタ民族解放軍」については以下の文献を参照。高山智博『メキシコ多文化思索の旅』山川出版社、2003年、141-166頁。小林致宏「サパティスタ運動の十年が提起したもの」(藤岡美恵子、中野憲志編『グローバル化に抵抗するラテンアメリカの先住民民族』現代企画室、2005年、9-19頁)。小林致宏「ボタン・サパタ神話における先住民伝承の取り込み」(京都外国語大学『京都ラテンアメリカ研究所紀要』第3号、2003年、73-92頁)。イグナシオ・ラモネ『マルコス ここは世界の片隅なのか——グローバリゼーションをめぐる対話』湯川順夫訳、現代企画室、2002年。山本純一『メキシコから世界が見える』集英社新書、2004年、134-183頁。
- 13) 「パチュコ」(pachuco)。「チカーノ」(chicano)と同様、メキシコ系アメリカ人、

あるいはアメリカ在住メキシコ人の意。

- 14) 「死者の日」については、高山智博、前掲書、55-66頁に詳しい。
- 15) これについては、映画のシナリオや作品に関する周辺資料を収録した以下の書を参照。セルゲイ・エイゼンシュテイン「メキシコ万歳！」中本信幸訳、現代企画室、1986年、151-160頁。
- 16) 同上、142頁。
- 17) パスの詩論については、以下の書を参照。Octavio Paz, *El arco y la lira*, México, Fondo de Cultura Económica, 1993. オクタビオ・パス「弓と豎琴」牛島信明訳、ちくま学芸文庫、2001年。

(